

卷頭言

〈小特集 2〉

〈翻訳者の使命〉はいかに受け継がれたのか

——ベンヤミン「翻訳者の使命」と、

20 世紀フランスを中心とするその受容——

Special Issue 2 :

How was “the task of translator” inherited ? : *The Task of the Translator* of Benjamin and its reception in and around France in the twentieth century

この小特集は、2023 年 3 月 25 日に立命館大学（衣笠キャンパス、末川記念会館第 2 会議室）にて開催されたシンポジウム「〈翻訳者の使命〉はいかに受け継がれたのか——ベンヤミン「翻訳者の使命」と、20 世紀フランスを中心とするその受容——」（主催：科研費・基盤 B「20 世紀フランスにおけるハイデガーとベンヤミンの受容史の解明」、立命館大学間文化現象学研究センター、立命館大学人文科学研究所、脱構築研究会）にもとづく論考を集成したものである。

ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）が 1921 年に執筆し、1923 年に公刊された「翻訳者の使命／課題」は、ベンヤミンの没後、さまざまな仕方で読まれながら現代に受け継がれてきた。今日、〈翻訳とは何か〉を考えようとするとき、ベンヤミンの論考は参照不可欠なものとなっている。その受容史のなかには、ジャック・デリダ、アントワーン・ベルマン、ポール・ド・マンといった思想家も含まれ、それぞれに特徴的な読解を繰り広げている。

このシンポジウムおよび小特集は、ちょうど公刊から 100 年目を迎える「翻訳者の使命／課題」をめぐる、ベンヤミンのテキストとその受容、ならびにデリダ、ベルマン、ド・マンによる読解の内実を検討することを通じ

て、このテキストが20世紀のとりわけフランスを中心とする思想史のなかでどのように継承されていったのか、その一端を明らかにする試みである。以下、収録される5つの論考の内容を紹介させていただく。

長澤麻子氏（立命館大学）の「ベンヤミンと詩の言語——『翻訳者の使命』の成立「環境」をめぐる」は、ベンヤミンが関心を寄せた文献学、書誌学、修辞学の視点に注目して、「翻訳者の使命」の成立に影響を与えた詩人たち（友人ハインツ、ゲオルゲ、ゲオルゲ派の人々、ヘルダーリン、ボードレールなど）との関係を明らかにしている。

柿木伸之氏（西南学院大学）の「言語の死後の生へ——ベンヤミンの「翻訳者の課題」とその継承——」は、故郷を失った言語を死後の生へと向かわせるものとして翻訳を意義づける「翻訳者の課題」について、その前史としてショーレムとの交流やローゼンツヴァイク、魯迅との同時代性を論じ、後史としてスピヴァク、デリダ、ツェランへと視野を広げている。

西山雄二氏（東京都立大学）の「フランスにおける「翻訳者の使命」の受容——アントワーン・ベルマンによる純粋言語と翻訳不可能性の解釈をめぐる」は、ドイツに遅れて始まったフランスの翻訳論の歴史を概観したのち、ベルマンの「翻訳者の使命」読解に焦点を当てて、純粋言語、宗教的契機、翻訳不可能性をめぐる議論を展開している。

亀井大輔（立命館大学）の「ベンヤミンを〈翻訳〉するデリダ「バベルの塔」について」は、デリダが「翻訳者の使命」を読解した論考「バベルの塔」を、デリダによるベンヤミンのテキストの〈翻訳〉として捉えつつ、「バベル」、翻訳の法、〈翻訳の翻訳〉について考察し、デリダにとって翻訳者の〈使命〉とは何かを追求している。

宮崎裕助氏（専修大学）の「永遠の乖離としての純粋言語——ポール・ド・マンのベンヤミン「翻訳者の使命」読解」は、ド・マンの「翻訳者の使命」読解をあらためて読み解き、乖離としての純粋言語や、歴史の非メシア的・非人間的な性格といった論点を究明していくことで、ド・マンがベンヤミン

の翻訳論から引き出した洞察を明らかにしている。

シンポジウムでは、以上の発表とそれに続く討論を通じて、「翻訳者の使命／課題」の成立からその広範な受容にいたる思想史が多角的に描き出された。それによって、〈翻訳とは何か〉という根本的な問いへの手がかりが得られたのではないかと思う。

最後に付記をしておきたい。ベンヤミンのこの論考は、日本語では「翻訳者の使命」と訳されることもあれば（晶文社の「ベンヤミン著作集」、ちくま学芸文庫の「ベンヤミン・コレクション」）、「翻訳者の課題」と訳されることもある（岩波文庫の「ベンヤミンの仕事」、河出文庫の「ベンヤミン・アンソロジー」）。Aufgabeをどう訳すか（フランス語では tâche、英語では task）、これもまた翻訳の重要な問題であろう。本特集の各論考においては、執筆者の意向によって、もしくは日本語の参照文献に準拠して、どちらかの訳語が用いられている。他方、シンポジウムのタイトルとしては「使命」のほうを用いることにした。それは、日本の受容史において長らく「翻訳者の使命」と呼ばれてきたという事実に鑑みてのことと、オーガナイズを務めた筆者（亀井）が「使命を受け継ぐ」という表現を好ましく思ったという理由からであり、他意はないことをお断りする。

また、シンポジウムの模様は西山雄二氏によって撮影され、YouTubeの「脱構築研究会チャンネル」にて（討論部分を除いて）視聴できる（<https://www.youtube.com/watch?v=7uZUXPiX0wE>）。

立命館大学教授
亀井 大輔

